

季刊誌 神奈川芸術劇場

モノ・人・まちをつくる創造型劇場KAATの広報紙

春夏

2022

ひらかれた
劇場へ。

KAAT PAPER

特集 芸術は、越えていく

対談 篠山紀信(写真家)×長塚圭史(KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督)

●「越境」で演劇は、広く、深く、豊かになる ●REVIEW ●神奈川へ、会いに〈横浜かをり〉
●長塚圭史の思いつき ●今日はKAATに何しにきたの? ●公演スケジュール 撮影=篠山紀信

< 特集「芸術は、越えていく」 >

「越境」で演劇は、広く、深く、豊かになる

文・作品解説=山口宏子(朝日新聞記者)

劇場で働く人たちは冒険が大好き。マンガを歌舞伎にしちゃおう。トレーラーが舞台、しかも美術作品!?。何百年も前の古典を通して「今」を考えてみよう。さあ、街へ飛び出そう! — わくわく、ドキドキしながら目の前の「線」を越えて、たくさんの新しい演劇を生み出しています。

「演劇」を「ちょっと近寄りにくい」と感じる人は少なくないかもしれません。確かに、いつでもどこでも見ることができる配信ドラマなどに比べて、チケットを手に入れ、劇場に足を運ぶ演劇は、アクセスにいくつかハードルがあります。でもそれを乗り越えると、楽しく、深い世界が広がっています。その世界をさらに豊かにしようと、演劇に関わる人たちは日々、考え、話し合い、実験や挑戦を繰り返しています。

そうした営みの一つに「境界を越える」試みがあります。

演劇の中で今、接する機会が多いのは、現代の言葉で書かれたせりふで物語が進む「現代演劇」でしょう。これは、明治時代、西洋に学ぶことで生まれた「新劇」というジャンルがもとになっています。「新劇」の歴史は100年余り。この間、大勢の人たちが、草創期の精神を発展させたり、批判を込めて新しい表現を追求したりしてきました。そこから、多彩な「現代演劇」が生まれています。

一方「能・狂言」「歌舞伎」などの古典も「現代の演劇」です。時代の異なる演劇が並行して生きているのは、世界の中でも珍しい、日本の特徴です。

英国で今上演されているシェイクスピア演劇の大半は、劇が書かれた約400年前のスタイルとは違う、現代の演出や演技手法の舞台です。しかし日本の古典演劇は、台本と演出・演技が丸ごと伝承されていることが多く、室町時代に完成した「能・狂言」も、江戸時代の民衆に愛された「歌舞伎」も、それぞれの時代の息づかいを引き継いでいます。観客は同時代を生きる俳優の身体を通して、それに触れることができるのです。

「能・狂言」や「歌舞伎」には、何百年の間、先人たちが工夫し、洗練させた独特の「様式=スタイル」があります。これが「ジャンル」を強く意識させます。ジャンルとジャンルの間には「境界」があります。こういって、線の向こうとこちらを分断するネガティブなもののように感じるかもしれませんが、演劇では「境界」がポジティブな働きをしています。演劇人たちは「自分たちのジャンルの特徴と得意技は何か」を深く考え、「違うジャンルの良いものを吸収しよう」と意

欲を燃やすからです。それが「越境」につながり、発見や創造の糧になります。

特に、古典演劇の人たちは「越境」に食欲です。能・狂言や歌舞伎などは「重要無形文化財」として、保護の対象でもあります。でもそれに満足して立ち止まると、博物館のケースの中で守られている古美術のようになってしまいかも。そんな危機感が強いからでしょう。

歌舞伎を現代に生きる演劇に。そう強く考え、果敢に行動した代表格が十八代目中村勘三郎さんです。残念ながら10年前、57歳で世を去りましたが、その精神は今も生きています。勘三郎さんはよく「型があってこそ『型破り』、『型なし』になってはいけない」と言っていました。「型」という歌舞伎の基本を理解し、身につけてはじめて、それを壊す表現に挑めるという意味です。「越境」の大原則といえる言葉だと思います。

一方、現代演劇の作り手にとって、先人たちの試行錯誤と思考の成果が積み重なっている古典は「宝の山」。それを踏まえることで、表現を生み出す土台がしっかりします。現代演劇を代表する劇作家、井上ひさしさんが約22万点の蔵書を寄贈した「運筆堂文庫」(山形県川西町)の本棚を眺めると、能楽や歌舞伎などの全集が目を引きまします。奇想に満ちた井上喜劇も古典を栄養にしていたことがよく分かります。

ここまで古典と現代の関係を中心に書いてきましたが、同時代の異分野の表現同士の「横方向の越境」も重要です。総合芸術である演劇にはもともと、音楽や美術、ダンスなど多様な表現がとけ込んでいます。その比率が変わったり、あまり交流のなかった題材と触れあったりすることで、新しい魅力が生まれることがよくあります。ここにも大きな可能性があります。

出会いと交流の新鮮な喜びとともに、演劇は「越境」を続け、地平を広げています。その楽しさは、これまで演劇とあまり縁がなかった人たちのすぐ近くまで来ているかもしれません。

まちがいの狂言

越境 Point シェイクスピア⇒狂言 学術⇒演劇

英文学者の高橋康也が、シェイクスピア喜劇を原作に狂言スタイルで台本を書き、野村萬斎が演出・主演した。2001年に初演し、上演を重ねている。顔がそっくりな2組の双子が登場し、周囲の人が兄を弟と、弟を兄と勘違いすることから、おかしな騒動が巻き起こる。狂言の面(マスク)を巧みに使い、一人の演者が兄と弟を瞬時に演じ分ける演出が鮮やかで、明るい笑いの底に「自分とは何だろう」という哲学的な問いも潜む。NHKテレ「にほんごであそぼ」で広く知られる「ややくしや、ややくしや」は、この作品の冒頭にあるやし言葉。ロンドン、ワシントン、パリでも上演された。



中央:野村萬斎(写真提供=万作の会)
2001年/ロンドン・クローブ座
主催:万作の会、世田谷パブリックシアター、International Shakespeare Globe Centre Ltd.
企画制作:万作の会、世田谷パブリックシアター

子午線の祀り

越境 Point 古典⇒現代

「平家物語」を踏まえ、滅亡する平家の運命を壮大に描いた木下順二の名作。1979年の初演以来、現代演劇、能・狂言、歌舞伎、各分野の俳優の共演で上演されてきた。初演は新劇の宇野重吉を中心に5人が共同で演じ、平知盛=嵐圭史(歌舞伎)、源義経=野村万作(狂言)、影身の内侍=山本安英(新劇)らが出演した。1999年の新国立劇場公演では知盛を野村萬斎(狂言)、義経を市川右近(現・右團次、歌舞伎)が演じた。2017年には萬斎が演出を一新。引き続き知盛を演じながら、成河(義経)、若村麻由美(影身の内侍)、河原崎國太郎(平家盛)、村田雄浩(阿波民部)ら出自の異なる俳優たちと「トータルシアター」を目指し、高い評価を得た。コロナ禍の21年には人数などを凝縮したバージョンで上演した。



中段左:野村萬斎、中段右:河原崎國太郎、手前中央:成河、舞台最奥:村田雄浩(撮影=細野晋司)
2021年/KAAT神奈川芸術劇場(ホール)
主催:世田谷パブリックシアター、KAAT神奈川芸術劇場
企画制作:世田谷パブリックシアター
共同制作:KAAT神奈川芸術劇場

夏祭浪花鑑

越境 Point 歌舞伎⇒現代演劇

東京・渋谷のシアターコクーンを拠点に、中村勘三郎と現代演劇の演出家、申田和美が手を携え、古典歌舞伎を読み直し、現代を重ね合わせて上演する「コクーン歌舞伎」。1994年に始まり、2022年までに18回の公演を行っている。中でも96年に初演された「夏祭浪花鑑」は代表作の一つで、ニューヨーク、ルーマニア、ドイツ公演でも絶賛された。江戸時代の大坂に暮らす市井の人々の心意気と情、そこから生まれる悲劇を濃密に描く。祭りの夜、主人公の団七が、強欲な義父・義平次を心ならずも手に掛けてしまう場面は、泥まみれの二人の凄惨な様式美と、祭りの狂騒が渾然となって圧倒的な迫力がある。義平次役を現代演劇の俳優、笹野高史が好演した。



左から、中村勘三郎、笹野高史(撮影=藤山紀信)
2008年/Bunkamuraシアターコクーン
主催:松竹株式会社・Bunkamura
製作:松竹株式会社

スーパー歌舞伎II ワンピース

越境 Point マンガ⇒歌舞伎⇒現代演劇

三代目市川猿之助(現・猿翁)は1986年、歌舞伎に現代演劇の手法も盛り込み、スピード・スペクタクル・ストーリーを重視した「スーパー歌舞伎」を始めた。それを当代の猿之助が引き継ぎ、さらなる進化を目指すのが「スーパー歌舞伎II」。この作品は尾田栄一郎の人気マンガ「ONE PIECE」を原作に横内謙介脚本・演出、猿之助演出で2015年に初演された。主題歌はゆずの北川悠仁。猿之助は主人公ルフィ、女海賊ハンコックなど3役を演じた。浅野和之ら現代演劇の俳優も出演。客席の上を斜めに飛ぶ宙乗り、早変わり、本水を使った立ち回りなど派手な演出が満載で、観客は大いに沸いた。



左から、市川猿翁、高島典俊、坂東巳之助、市川笑也、市川猿之助、市川春猿、中村隼人、石橋直也、井之上チャル(©尾田栄一郎/集英社・スーパー歌舞伎II「ワンピース」パートナーズ)

2015年/新橋演舞場
主催:スーパー歌舞伎II「ワンピース」パートナーズ
製作:松竹株式会社

シネマ歌舞伎「スーパー歌舞伎II ワンピース」2022年9月30日公式MOVIX熊本、109シネマ湘南は全国にて上映。詳しくはシネマ歌舞伎公式HPにて。

日輪の翼

越境 Point 美術⇒演劇

熊野の「路地」を追われた老婆たちが冷凍トレーラーで旅に出る物語(中上健次原作、山崎なし脚本)を、写真作品などで知られる美術家で、演劇にも積極的に取り組んでいるやなぎみわが演出した野外劇。音楽、サーカスパフォーマンス、ボールダンスなども盛り込み、2016年に横浜・赤レンガ倉庫イベント広場で初演した。熊野や大阪など、6ヵ所で上演されている。この演劇のために、やなぎみわは移動舞台車「花鳥虹」を制作した。トレーラーの荷台の屋根と壁が開き、ステージと舞台装置になる。中上の小説に出てくる架空の花「夏芙蓉」などが描かれ、電飾が輝くこの車そのものが美術作品。2014年のヨコハマトリエンナーレに出品された。



前列左から、Mecav、石籠鐘
後列左から、輪村泰、村岡哲志、上川路啓志、西上安幸(撮影=bozzo)

2016年/横浜赤レンガ倉庫 イベント広場(野外公演)
主催・製作:KAAT神奈川芸術劇場、やなぎみわステージトレーラープロジェクト

ムサシ

越境 Point 現代演劇⇒能・狂言

劇作と演出で現代演劇をリードした井上ひさしと蜷川幸雄が初めてタッグを組み、宮本武蔵と佐々木小次郎の「その後」を描いた。決闘に敗れた小次郎は復讐心に燃えて、武蔵がいる鎌倉の寺を探して、再戦を迫る。居合わせた人たちが二人の闘いをやめさせようとするが……。物語は二転三転し、ふんだんに盛り込まれた笑いの中から「報復の連鎖を止める」という大きなテーマが浮かび上がる。劇中には能・狂言の要素がちりばめられ、死者たちが人間に語りかける劇の構造も能に通じる。2009年の初演から武蔵役は藤原竜也。小次郎役は小栗旬、勝地涼、溝端淳平が演じてきた。10年ロンドン、ニューヨークで絶賛された。世界6カ国10都市で上演されている。2021年公演は、蜷川オリジナル演出に基づき、吉田鋼太郎が演出を担当した。



手前左から、溝端淳平、藤原竜也(撮影=田中道紀 写真提供=ホリプロ)
2021年/彩の国さいたま芸術劇場
主催:公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団/ホリプロ
企画制作:ホリプロ

未練の幽霊と怪物 -「挫波」「敦賀」-

越境 Point 能⇒現代演劇

旅人が出会った不思議な人物(シテ)は、実は亡霊で、後半でその本性を現し、現世に残した思いを語る。この「夢幻能」の形式を踏まえて、岡田利規が作・演出した。「挫波」のシテは、東京五輪のメイン会場・国立競技場のデザインコンペで最優秀に選ばれながら、その案が葬られた建築家。「敦賀」のシテは巨額の国費を投じながらほぼ稼働せずに廃炉が決まった「核燃料サイクル政策の亡霊」。イメージを喚起する詩的な言葉の中に、政策の失敗を検証せず、うやむやにする日本社会への鋭い批評があった。シテを森山未來、石橋静河が務め、演技、音楽、舞が一体となった優れた舞台が生まれた。コロナ禍で1年延期され、2021年に初演された。



前列左から、太田信吾、森山未來
後列左から、片桐はいり、吉本裕美子、内橋和久、筒井肇子(撮影=高野ユリカ)

2021年/KAAT神奈川芸術劇場(大スタジオ)
企画制作・主催:KAAT神奈川芸術劇場

現代演劇

「王将」-三部作-

越境 Point 劇場⇒街

長塚圭史がKAAT神奈川芸術劇場の芸術監督に就任して最初に取り組んだ作品。大阪生まれの天才棋士、坂田三吉の波乱の生涯を北條秀司が描いた3本の劇を長塚が構成し、演出した。貧しく、無学で無鉄砲だが邪心のない主人公と彼を取り巻く人たちの群像劇だ。週末は3本続けて上演。芝居を見る楽しさにあふれ、計6時間余りの長丁場が短く感じられた。ユニーだったのは上演会場。劇場アトリウムの道路に面した一角を派手な幔幕で囲った特設空間で、屋間は外光が入り、車や人が行き交う音も聞こえる。それが不思議と邪魔にならない。外の道からも中の様子うかがえる。厚い壁に囲まれた建物から演劇が外に飛び出して街と緩やかにつながる伸びやかさが心地よかった。



左から、福田転球、常盤貴子(撮影=細野晋司)
2021年/KAAT神奈川芸術劇場(アトリウム特設劇場)
主催:KAAT神奈川芸術劇場
企画・制作:新ロイヤル大衆会、KAAT神奈川芸術劇場

篠山紀信 × 長塚圭史

時代の変化と共に歩み・写す巨匠の軽やかな「越境」

取材・文＝尾上そら 写真＝五十嵐一晴



二人の出会いと「演劇を撮る」ということ

長塚 篠山さんに久々にお会いできて嬉しいです。

篠山 確かに久々で、しかもKAATのホール舞台上という光栄な場所にお招きいただけたけれど、僕に話せることなんかあるかな？

長塚 もちろんですよ！ここは舞台芸術の関係者や演劇に興味のある方にはよく知られた劇場ですし、自主制作での年間公演数も非常に多い。でも所在地である神奈川県はとても広い自治体で、県の西側に住む方々など、まだKAATに触れていただけていない県民の皆さんもたくさんいらっしゃいます。だから劇場や舞台芸術への入り口を増やしてKAATを知っていただくため、昨年僕が芸術監督になってから、広報誌の内容も色々変えています。篠山さんのようにジャンルの異なるアーティストや、学者の方などにもお声がけしてお話を伺うようにしています。

篠山 異ジャンル枠で呼んでくれたんだ(笑)。出会ってから結構経つけれどアナタ、留学したり芸術監督になったり、どんどん偉くなってますね。

長塚 (笑)別に偉いわけではないですよ、芸術監督は。

篠山 最初の頃に観た芝居なんか、舞台上に本物のトラックがドーンと突っ込んで来て、あれはサイコーだったけれど、偉くなるにつれて「真面目な芝居をしなきゃ」とか思い始めちゃったんじゃないかなあって。

長塚 阿佐ヶ谷スパイダースの『はたらくおとこ』(2004年初演)ですね。一番最初は02年の『ポルノ』を観てくださったんですよ。

篠山 若い世代の小劇場演劇なんか観たことなかったんだけど、僕は当時、小島聖さんの写真集が作りたくて。自分の考えをしっかりと持った人だから、まずは彼女の仕事をちゃんと観なければと調べたら、長塚さんの劇団公演に出ていたんですよ。小島さんの魅力もちゃんと引き出されていて、彼女に話を聞いたら「長塚さんは大した人なんだ」と言われ、以来長塚さんの公演は可能な限り観るようにしてきました。

長塚 同世代の演劇や演劇人を撮る機会はなかったんですか？

篠山 写真を撮り始めた頃に、早稲田小劇場(鈴木忠志、別役実らが1966年に結成した劇団)の稽古場は撮影に行ったことがあるよ。看板女優の白石加代子さんの、イイ写真が撮れたんだけど。その稽古中、剣道着で竹刀を持った男が舞台の花道みたいなのから走り出て来て、白石さんにワッツと文句を言うシーンがあってすごく面白かった。でも本番を観に行ったらその場面がなくて、「なんでなくなったの？」と訊いたら「あれは演出・鈴木のだメ出しです」って(長塚爆笑)。後は唐十郎の状況劇場にも行った。

長塚 当時すごく人気があったんですよ？

篠山 というか、カメラマンの間で「モダンジャズを聴き、アングラ演劇を観ないと写真が上手くならない」という伝説が、まことしやかに囁かれていたんですよ。当時はセロニアス・モンクなどジャズの巨匠が続々来日していた頃。あとで

『十八代目中村勘三郎写真集』を始め、数多くの舞台や俳優たちを撮り続ける写真家の篠山紀信さん。

舞台を撮り続ける意味や、これまで目撃してきた「越境」の瞬間を、長塚芸術監督と語り合います。

う一つがATG(日本アート・シアター・ギルド)映画かな。でも僕が面白いと思えるものはなかなかなかった。ほらあ、ゲストの人選間違ったんじゃない?(笑)。

長塚 いやいや、そんなことはありません。

篠山 あ、長塚さんの芝居でもう一つ、すごく良かったのが三好十郎だった！
長塚 葛河思潮社『浮標』(11年初演)ですね。あの時は驚いた。観終わった紀信さんが楽屋へ飛んで来て、「良い舞台だ。なんでオレに撮れって言わない！」と詰め寄られて。「ぜひお願いします」と言ったら、火の玉みたいな勢いで撮りに来てくださったんです。

篠山 写真にするには難しい舞台だったんだけど。そうだよ、あの時「興味があるものは全部写真になると思ったら大間違い。これは本物の演劇だから、君には無理だ」くらい言ってくれても良かったのに。

長塚 言えるわけないじゃないですか！(笑)。

篠山 ちょっと長過ぎるのが難けどね。

長塚 クレームは三好さんにお願いします(笑)。

体験を肉体化することで生まれた作品の強み

篠山 あと、PARCO劇場で観た『ピローマン』(04年)も良かった。長塚さんは、『はたらくおとこ』もそうだけど、自作でも他の人の戯曲でも、社会に渦巻く暴力的なエネルギーが爆発する瞬間を演劇で描かせるとすごく上手いと僕は思う。

長塚 ありがとうございます。

篠山 でもKAATでは、長塚さんの得意な部分だけの創作をしていけばいいわけではないよね？まず神奈川県民のことを考えないといけない。

長塚 はい、最初に言ったように作品創りだけでなく、劇場を知っていたり、舞台芸術全般に興味を持っていたことも仕事のうちですね。

篠山 同じことをダンスでやっているのが、りゅーとびあ(新潟市民芸術文化会館)の専属舞踊団Noism Company Niigataの芸術監督をやっている金森穰さんですよ。ここでも公演しているよね？

長塚 何度も来ていただいています。

篠山 アナタだったら阿佐ヶ谷スパイダース、金森穰ならNoism。それぞれの集団や作品の良さがわかる人が主たる観客で、でも芸術監督がめざすのはそこではなく、初めて劇場に来た人が観ても面白い作品をつくること。違う？

長塚 いや、まさにそういうことで、今エネルギーを注ぎ込んでそのことに取り組んでいるんです。つい先日終わったばかりの『冒険者たち ～JOURNEY TO THE WEST～』という作品は、西遊記をベースに、三蔵法師と孫悟空ら一行が何故か神奈川県に迷い込むという設定で。県内の様々な故事・俗伝、各地の神様、美味しい店なども物語に取り込み、生演奏や歌、影絵など演劇のマジックをふんだんに盛り込み、おとなも子どもも楽しめるような趣向で

つくりました。神奈川県内を巡演しましたが、これはありがたいことにウケました。結構、演劇的には尖ったこともしているんですが。

篠山 ちゃんと伝わったでしょ？

長塚 そうなんです。県知事もご覧になられて「ぜひ続けて欲しい」とおっしゃっていただきました。ご当地の名所・名物が出てくる場面は驚くほど反応が良くて。

篠山 オリンピックのプレ事業で、野田秀樹さんが総監修をやっていた「東京キャラバン」が同じ発想なんだよね。各地にアーティストを派遣して、地域の郷土芸能や祭礼、それぞれの文化と人材を取り入れたクロスオーバーなショウを構成し国内を巡るというもので。感染症禍のため、志半ばになってしまったけれど、でも非常に意義のあるもので観客の舞台芸術の経験値などに関係なく楽しめるものになっていたと思う。そういう創作や地域を回っての公演の大切さに、長塚さんが気づいたところはエライ！(盛大に拍手)。

長塚 ありがとうございます。

篠山 そういう、現地に出かけて人や題材と出会い、自分の肉体に取り込んで作品化していく過程はとても重要だし、幅広い地域と人に舞台芸術やアートを繋げていくためにも必要なことだと思いますよ、私は。

急激に変わりゆく時代を撮り続ける「宿命」

長塚 今回のKAAT PAPERのテーマが「越境」で、紀信さんはジャンルや世代、流行、国境などあらゆる境界を越えて来た越境者だと思うんです。中でも、先ほど名前が出たNoismの作品などでは、舞台上に篠山さん自身も一緒に上がり、進行する作品に入り込んで撮影していますよね？究極の「越境」ではないかと思うのですが、あれはどういう発想がもとにあるのでしょうか。

篠山 一番最初に「舞台上上がって撮りたい！」という衝動を感じたのは、さっき話した早稲田小劇場の稽古場だね。でも竹刀で叩かれたらカメラが壊れると思って引いたけど(笑)。鈴木さんが自分の芝居に対してグワーツと熱が燃えた時は、芝居の虚と現実の境目がなくなり、観ているほうも感動する。「これはスゲエな」と。そんな熱の渦中に入ったら、見えるものも違うと思うでしょう？で、気づいたら身体が動いてしまう、ということですよ。アナタは俳優もやるからわかるんじゃないかな、この感覚。

長塚 わかります。

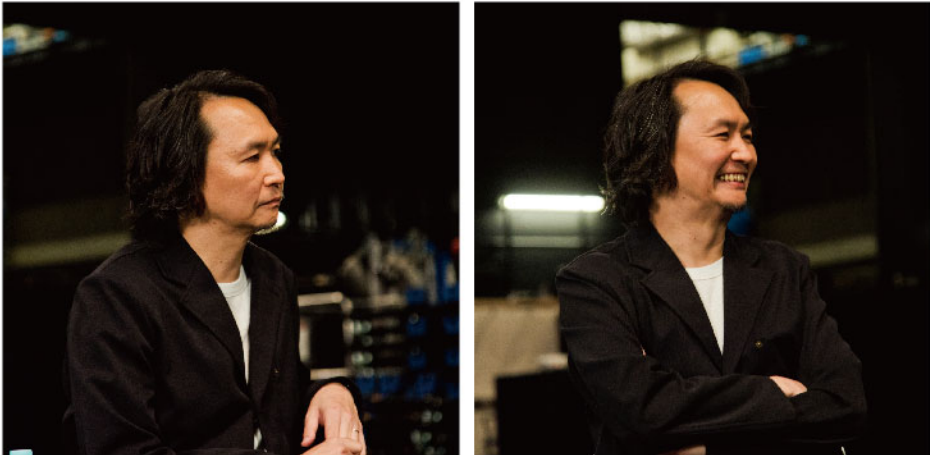
篠山 Noismはカメラ越しに観ていても、段々近づいていきたくなるし、最後は踊りたくなってくる。NODA・MAPの舞台稽古なんかも同じで、最初こそびっくりする人もいるけれど、すぐ皆さん「あ、篠山は舞台上上がって撮るんだ」と飲み込んでくれて。もちろん、上っちはいけない舞台もあるけれど。

長塚 それはどういう作品ですか？

篠山 歌舞伎はいけないものもある。長く撮り続けている(坂東)玉三郎さんは、舞台稽古は「上がっていい」と言うけれど、全部が全部OKってわけではないね。あと歌舞伎は観客がいる時といない時では舞台上の役者の心意気がまったく変わるから、本番しか撮らない。でも、「舞台上上って一緒に踊らなければ撮れない」とまで思われたのはNoismかな。NODA・MAPは、撮影用のライトを入ると役者がイイ表情、イイ芝居を見せてくれたりするんです。だから段々、舞台上上って一緒に芝居をして撮る機会が増えていったというところはあるね。それを野田さんは許してくれた。

長塚 僕が演出した芝居ではハロルド・ピンターの『背信』(14年)を、舞台上で撮っていただいたんですが、撮影している紀信さんの気配がまったく気にならなかったのがすごいなと思って。

篠山 よけるのと消えるのが上手なんだよ、ダンサーだってひょいひょいですよ。一度もぶつかったことがない。(長塚笑)



長塚圭史



篠山紀信

写真家。1940年東京生まれ。日本大学藝術学部写真学科在学中に広告写真家協会展APAA賞受賞。広告制作会社「ライトパブリシティ」を経て、68年より写真家として活動。66年東京国立近代美術館「現代写真の10人」展に最年少で参加。76年にはヴェネツィア・ビエンナーレ日本館の代表作家に選出される。71年より「明星」の表紙を担当して以降、時代を牽引する存在となる。2020年第68回菊池寛賞など受賞歴多数。

長塚 海外に対してはどうなんですか？僕は08年からイギリスに一年間留学していて、その時は、それまで自分が劇団でつくり続けていた芝居について煮詰まったりもしていて、心の休息と充電の両方を外国に求めたところがあったんです。紀信さんにとつての海外は、どういう場所なんですか？

篠山 カメラマンは海外に行かなくちゃダメ。全て体験し、体感しないと写真は撮れないんですよ。例えば僕は東京生まれの東京育ちで、「海」と言われて思い浮かぶのはせいぜい江の島。駆け出しの頃、「海でヌードを撮ろう」と思い立ち、モデルを連れて三浦半島の海岸に行ったんですよ。その写真をカメラ雑誌の編集者に見せたら「お前は海を知らない、本物の海を見たことがないだろう」と言われて、ハッと気づいた。さらに「本気でカメラマンになるなら、透明な海で強い太陽に灼かれて痛い思いして撮った写真を持って来い」と突き返され、一念発起してバイトで資金をため、徳之島に一週間、モデル5人のロケ隊ごと行って撮影したのがコレ(取材当日に篠山氏の着衣にプリントされていた1968年の作品「birth」)ですよ。

長塚 この作品カッコいいよなあ！

篠山 当時はまだ沖縄が復帰していないで、国内線で行ける一番南の島だったんだけど、飛行機を降りたとたん空気も日差しも海的美しさも何もかもあまりに違い、「モデルが裸ならオレも裸だ！」と脱いで撮影して(長塚爆笑)。翌日は全身やけど状態で休みましたよ(苦笑)。そこから「行かなきゃわからん！」の精神で、世界中に出かけていくことになる。リオのカーニバルを撮った「オレレ・オララ」(71年)は、4日間町中が踊り続ける中での撮影で、通りを渡りたくても踊る人波に遮られてしまう。でも、踊りながら飛び込んでいったら通りも渡れるし撮影もできた。そんな体験全てが、僕の写真になっているんです。もちろん頭の中で構図やイメージをつくり込む、観念的なカメラマンもいるけれど、僕のような肉体派はその場に行き、現象や行為にまみれて撮らないとダメなんだよね。

長塚 東日本大震災の時も、紀信さんは直後から東北に入って撮り始めましたよね？

篠山 ああいう時こそ迷わずに行かなければダメですよ。新聞など報道の、他人の撮った写真からは何も得られない、僕みたいなタイプはね。

長塚 なるほど、それこそが篠山紀信の「越境」なんだ！お話を伺いながら、ガツンと腑に落ちました。南海の島も南米の祭りも、震災の被害を受けた土地も全て体感しなければ納得できないし、その先にしかご自身の写真、クリエイションはないんですね。去年、東京都写真美術館で「新・晴れた日 篠山紀信」という写真展をされましたよね？

篠山 75年に「晴れた日」という写真集を出しているんだけど、その続き、60年間撮り続けた写真を、それこそジャンルを越境して編んだ展覧会だね。

長塚 あの美術館のフロアに昭和と平成が丸ごと、凝縮して詰め込まれたように衝撃を受けました。どうしたら、あんな風に時代と並走できるんですか？

篠山 僕の場合は、「家の寺は兄が継ぐから将来は好きにしろ」と放任されて。時代的にも戦争が終わった焼け野原に始まり、高度経済成長をまんま体験しながら育っていったわけだ。で、食べていくため仕事として写真を始めたものの、報道や芸術だけではなく、広告分野での写真の需要がどんどん高まっていく時期でもあって。ものすごいスピードで激しく変わる時代を生き、それを撮影するという、どこか宿命じみた時代との関係性があるかも知れないね。

長塚 とても、この場では伺い切れない続きがありそうです。それはまた機会を変えないと、でしょうか。今日は貴重なお話をありがとうございました。

REVIEW



『アルトゥロ・ウイの興隆』

2021年11月14日(日)ー12月3日(金)
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

そこで何が起きたのか、 客席で体感する熱狂のからくり

文=田中伸子(演劇ジャーナリスト)

作:ベルトルト・ブレヒト
演出:白井晃
音楽:オーサカ=モノレール
振付:Ruu
出演:草薙剛
松尾諭、渡部豪太、
神保悟志、小林勝也
榎木孝明

劇作家・演出家ベルトルト・ブレヒトがヒトラー率いるナチスの迫害から逃れ、亡命先で執筆した「アルトゥロ・ウイの興隆(1941)」。そこで作家は急伸する独裁者=ヒトラーの姿をシカゴのギャング、ウイにぞらえ母国の民に対し状況を客観視するよう、アラートを発した。



撮影=田中亜紀

今回、演出家白井晃は今日の観客に対し、20世紀を代表する劇作家の言葉を通しどんなメッセージを届けようとしたのだろうか。

一般市民の熱狂がその独裁者の台頭を援護、熱狂の渦の中で彼らは容易く理性を失ったのだという事を観客たちに身をもって体感してもらうことに他ならない。

そのために必要不可欠だったのが、主役ウイを演じた草薙剛の圧倒的なスター性と観客を陶醉させるステージで名高いジェームス・ブラウンの音楽をライブで歌い、地団駄を踏むオーサカ=モノレール、中田亮のパフォーマンスだ。

目の前で繰り広げられる華やかなステージングに誰がおとなしくなっていていられようかーニュルンベルクでのナチス党大会壇上のヒトラーに歓喜の声をあげた人々のように。

白井の狙いは確実に果たされ、そしてバトンは客席側へと渡された。熱狂の後で考えるのは私たち。過ちを未来へ活かすのも私たちだ。

『Le Tambour de soie 綾の鼓』

2021年12月24日(金)ー26日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

演出・振付・出演:伊藤郁女、笈田ヨシ
テキスト:ジャン=クロード・カリエール
音楽:矢吹誠
演奏・出演:吉見亮(SPAC)

多幸福感に満ちた 『綾の鼓』

文=伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

ほぼ裸舞台の中央奥に、天井から床まで届く長さの、反物を広げたような薄衣が掛かっている。ささやかな風にも揺れ、容易に後ろが透けて見える軽量感で、照明を反射した繊維が、キラキラと角度を変えて陰影をつくっている(照明:Arno Veyrat、テキスト:ル・アウロール・ティブット & ヌーベル・ド・マゾンヌーヴ)。こんなにも薄く柔な布を、女は皮の代わりに鼓に張ったというのか。

鳴るはずのない鼓の音を鳴らすことができたなら、顔を拝ませてやる。下賤な庭掃きの老人の恋心と、それを弄ぶ高貴な女性の残酷な仕打ちが印象的な能『綾鼓』。が、劇場に稽古に訪れた若い女性ダンサー(伊藤郁女)と清掃員の老人(笈田ヨシ)に置き換えられた、このせりふの少ないフィジカルな物語(脚本はピーター・ブルックとの共働でも知られたジャン=クロード・カリエール)からは、女のマゾヒズムや、老人の絶望や執心といった、ネガティブな感情はほとんど匂ってこない。女は、老人の視線を意識することで艶めかしく輝きを増してゆくし、老人に至っては、女のリードとともに踊るひとときを心おきなく楽しむと、女が去った後もその多幸福感が持続していて、彼女を恨む気も寂寞感に襲われる様子も、さらさら無さそうに見えるのだ。女性ともモップとも常夜灯とも隔てなく戯れる笈田には、死してなお現世の妄執に苦しむ『綾鼓』や、老醜を強調した三島由紀夫の『綾の鼓』より、月光の下で無と化して自在に舞う『娵捨』の老女の霊が重なって見えた。伊藤の南アジアの古典舞踊を彷彿させるしやかな動きが鮮やか。吉見亮のパーカーカッションは、舞台袖に居残り、楽器の調整でもしている体(てい)の演劇的な存在感を保って、作品の強度を支えていた。老いを全肯定する、前向きな『綾の鼓』だった。



©Y. Inokuma

『横浜国際舞台芸術ミーティング 2021 (YPAM2021)』

2021年12月1日(水)ー19日(日)

劇団態変が 体現する時間

文=島貫泰介(美術ライター/編集者)

2021年度は九州で暮らす筆者は、YPAM2021をオンラインのみから観ることになった。そのためここでは、劇団態変の三部作『さ迷える愛・序破急』を対象に論じる。劇団態変の作品の時間はとてもスローに流れる。それは演者たちの主要な移動方法が「這う」転がる」に限定されることにもよるが、YPAMで上演された『さ迷える愛・序破急』三部作を貫く主題とも、それは深く関わっているように思われる。



撮影=前澤秀登

3つの作品はバリエーション豊かだが、一方で個々の「芸術としての達成」は必ずしも明快ではない。第一部の『翠晶の城 - さ迷える愛・序』は、ロシア構成主義を思わせる幾何形態と呼応するような抽象的なダンス作品であり、第二部『箱庭弁当 - さ迷える愛・破』は一転してコミカルな演劇仕立てに変わる(三部作は2016年に起きた「相模原障害者施設殺傷事件」を着想源にしており、とくに第二部で体現されるある種の「明るさ」は、社会構造の闇と不可分である)。さらに第三部『心と地 - さ迷える愛・急』は、デストピアSF然として、『2001年宇宙の旅』の人工知能を持つコンピュータ・HAL9000を思わせるガジェットまで登場するのだ。これはいったい?

三部作は近代以降の労働を巡る変遷史として見る事ができる。新たな社会主義の起点としての20世紀初頭のロシア革命(序)。20世紀後半の昭和・日本における高度経済成長期(破)。そして大きく時間をあけた未来の管理社会における労働(急)。利便性を謳ったSNSやクラウド型サービスを介して、より巧妙に市民生活と一体化された今日の労働からすれば、態変が参照した未来図は懐古的すぎるが、現実をひどく皮剥けば、そこに広がるのは近代以降変わることのない苛烈な搾取であり、摩擦するのは常に人の心と体である。態変が現出するスローさは紛れもなく貧苦に苛まれる今日の我々の姿であり、レオタード姿で這いずり回り、苦悶の声を洩らす演者たちは我々とは無関係な他者・異物ではない。第二部の、どかなスピードで進む路面電車ですら乗れない/乗れなかった人物が私の胸を打つ。

<KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト 第一弾>

『冒険者たち ~JOURNEY TO THE WEST~』

2022年2月8日(火)ー2月16日(水)
KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

ほか川崎、相模原、大和、厚木、小田原、横須賀の県内6都市を巡演。

*大和、厚木公演は、公演関係者に新型コロナウイルス感染症の陽性が確認されたため、中止。

上演台本・演出:長塚圭史
(原作:吳承恩『西遊記』)
共同演出:大澤遊
音楽・演奏:角銅真実
出演:柄本時生、菅原永二、
佐々木春香、長塚圭史、成河

長塚圭史という冒険者

文=笠井信輔(フリーアナウンサー)

「これ、圭史さんが書いたのですか?」。KAAT宣伝担当の森さんにまず聞いた。こんなに楽しくて飾らない“長塚芝居”を見た記憶がなかったからだ。

私は神奈川のお隣、町田に住んでいた(その昔、徳光さんがズームイン朝で「神奈川県町田市」と紹介して全市民が「東京だよ!」と突っ込んだあの町田)。相模原、厚木、川崎、海老名、大山、丹沢、もうどれだけ遊びに行ったか!三蔵法師御一行様が天竺に行く途中に神奈川県に迷い込み(笑)、そんな場所に次々登場するこの芝居が楽しくて仕方なかった。

「神奈川の神奈川による神奈川のためのお芝居」、それがこの『冒険者たち』なのだ。冒頭、三蔵法師に向けられた「ここはジャック&ベティです」というセリフにまず爆笑が起きる。その笑いが分かる自分がさらにうれしい。おお!これってジモティ見に来てるんじゃん(←神奈川の方言ね!)。神奈川の仲間たちと過ごす至福の時間だった。

長塚圭史氏はKAATの芸術監督になって大きな変化を見せていると感じる。その昔は演劇人としてかなり先鋭的なセンスで勝負をしていたのだ。特に2008年の文化庁・新進芸術家海外留学制度による英国留学後の作品は、「さあ、これで何を感じますか?」と観客に解釈をゆだねる作品が多かった。演劇ファンの私はその難解な挑戦を楽しんでいた。

しかし、今、長塚芸術監督は演劇の門を大きく開こうとしている。『王将』ではロビーを舞台に変えた。この作品はKAATの外に出して神奈川各地で上演。演劇を市民に近づけようとしているのだ。求めているのは“解釈”ではない。「地元のみんなでお芝居楽しんじゃおうよ」という純粋な思い。だって神奈川には、こんなに素敵な劇場があるのだから。ね。



撮影=宮川舞子

『ラビット・ホール』

2022年2月23日(水・祝)ー3月6日(日)
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

作:デヴィッド・リンゼイ=アペアー
上演台本:篠崎絵里子
演出:小山ゆうな
出演:小島聖、田代万里生、
占部房子、新原泰佑、
木野花

止めていた時間が動き出す 鮮やかな瞬間

文=杉山弘(演劇ジャーナリスト)

身近な人の死に見舞われたとき、残された人間はどう生きたいのか。理不尽な思いや後悔、そして深い悲しみが去来する苦しい胸の内に寄り添い、次の一步を踏み出すヒントをこの舞台は考えさせてくれる。2007年に米ビュリツァー賞に輝いたデヴィッド・リンゼイ=アペアーの戯曲(翻訳=小田島創志、上演台本=篠崎絵里子)を小山ゆうなが演出した。

ハワイ(田代万里生)とベッカ(小島聖)の夫婦は、4歳だった一人息子を交通事故で失った。息子の気配を感じさせる物事から遠ざかることで心の痛みを和らげようとするベッカに対し、ハワイは息子を撮影した動画を繰り返し見ること、良い思い出とともに悲しみを乗り越えようとしていた。この癒し方の違いで夫婦関係がギクシャクしはじめ、ベッカは母(木野花)から早く立ち直るよう促されて苛立ち、妹(占部房子)から申し訳なさそうに妊娠したことを告げられて戸惑う。

1幕のベッカは抱え込んだ虚しさに「心ここにあらず」の状態。家族との会話がかみ合わない小島の演技が気に入り、なかなか物語に入り込めなかったが、2幕に入って引き込まれた。同じく息子を亡くしている母に、「この感情、消えるのかな」と尋ねたとき、「消えない。でも重さに耐えられるようになった」と聞いて、ベッカが心を少し開くシーン。加害者の少年(新原泰佑)が描いた漫画の世界観を聞くシーンでは、別の世界で息子と幸せに暮らしている自分の姿を想像することで安らぎを得る。想像力を信じることで止めていた時間を動かしていくベッカの姿を小島が鮮やかに描き出し、木野の自然体で柔らかい演技、田代の物静かで知的な演技もあいまって、温かい感動に包まれる舞台に仕上がった。



撮影=田中亜紀

神奈川へ、会いに〈横浜かをり〉

第3回
長塚芸術監督が、今、気になっている街の人々にふらっと会いに出かけます。第3回目は、横浜を代表するレストランであり、フランス洋菓子が人気の〈横浜かをり〉社長の板倉敬子さんを訪ねました。

長塚 僕は〈横浜かをり〉のレーズンサンドが好きでよくいただいているのですが、このお店の歴史は戦後すぐに始まったそうですね。

板倉 昭和22年(1947年)に、母が横浜橋近くで開いた喫茶店が始まりですから、創業75年になります。祖父が日本郵船の外国航路船、龍田丸の司厨長を務めていたこともあり、砂糖とコーヒー豆が手に入ったので、それを元手に始めたそうです。

長塚 伊勢佐木町5丁目に移転してから、フランス料理を始めたそうですが、当時はフランス料理店は珍しかったのでは。

板倉 龍田丸で世界を回った祖父が、一番魅せられたのがフランス料理だったんです。祖父の部下だったコックさんが手伝ってくださって。

長塚 当時の横浜の雰囲気はどのようなものだったんでしょうか。

板倉 戦前にあったホテルもレストランもGHQに接収され、大変な時代だったそうです。横浜橋の周辺は無法地帯のような荒々しい雰囲気が残っていたのですが、伊勢佐木町のあたりは横浜の中心でしたので、街もお店も大変賑わっていたそうです。

長塚 山下町に移転してから、板倉さんもお店の経営に?

板倉 母がアメリカ視察に行き、郊外型のレストランを開きたいと、街はずれだった山下町に移転したのが昭和45年(1970年)です。その頃、私は子どもも小さく育児に専念していましたが、ある時、お店に足を運んだら、ボーイさんがぶっきらぼうな接客態度だったんです。これではいけないと思い切って経営に飛び込みました。山下町はまだ人通りもまばらでしたので、果売りに売り込みに行ったり、母校の聖心女子大学の総会にケータリングを届けたり。それが話題になって「出張料理の時代が来る!」と大手新聞社から取材を受けたこともあり、少しずつみなさんを知っていただくようになりました。

長塚 芝居の稽古をしていると、お弁当よりもケータリングだとみんなが喜ぶんです。当時の方も、温かい料理は嬉しかったでしょうね。洋菓子を始めたきっかけは?

板倉 当時、神奈川県知事だった長洲さんが、デザートトリフを気に入ってくださったことからレズの横で販売を始めました。トリフでデザートから出店の誘いがあったのですが、街で人気の



あったレーズンサンドも作れないだろうかと提案されまして。パティシエさんたちは忙しいので、私が雪印の研究所に通いながらレシピを考案したのが、今もお店で販売しているレーズンサンドです。

長塚 板倉さんが生み出したものだったんですね! それにお客様を待つだけでなく、いろんな試みをされていたことにも感動しました。僕らもKAATを知ってもらうために、街に出ないといけませんね。

板倉 今は、桜ゼリーや宝石ゼリー(8色の味のペクチンゼリー)などお菓子の種類が増えましたが、より美味しいものをお届けしていきたいと思っています。

長塚 劇場に来る方も、僕らもとても楽しみにしています。

《第2回》

みなとあん
味奈登庵 総本店

KAAT関係者の行きつけスポットを紹介するこの企画。
第2回目はKAAT内で「すごい」と噂のメニューがあるそば処
(味奈登庵)を訪ねました。

つけ天そば ¥968

創業53年目を迎える(味奈登庵 総本店)があるのはKAATから徒歩2分の場所。KAAT広報担当が教えてくれた一品が、「つけ天そば 富士山盛り」です。富士山のようにそびえ立つ蕎麦の重量はおよそ1キロ。ゆうに3人前以上はあるとのこと。しかも、このそばの量にもかかわらずお値段は、並盛り、大盛りと同じなんです。驚くのは量だけではなく、(味奈登庵)の蕎麦は、挽き立て、打ち立て、無添加天然だしが特徴。香り高くコシのある蕎麦を、昆布、鰹、宗田鮫、さばの本枯節からじっくりとただしが引き立ちます。サクサクの天ぷらと合わせて味わえば、噂になるのも納得です。

味奈登庵 総本店
〒231-0023
神奈川県横浜市中山区山下町25
☎045-641-8290 営業時間:年中無休
11:00 ~ 22:00(L.O.21:30)
※新型コロナウイルスの感染拡大対策等により
営業時間は変更となる場合があります。

長塚圭史の思いつき

これからの新しいKAATを探るなら、そのヒントは長塚芸術監督の頭の中にあるはず。そこで、「長塚さん、最近どうですか?」と、今ぼんやりと考えていることを聞いてみました。



「越境する芸術」という特集テーマが決まり、真っ先に思い浮かんだのが、写真家の篠山紀信さんです。篠山さんは写真を撮ることで、あらゆる領域を「越境」をしていく存在です。昨年、東京都写真美術館で開催された「新・晴れた日 篠山紀信」展では、ポートレート、広告写真、東日本大震災の被災地の風景など、60年以上に渡る篠山さんの作品が展示されていました。それはまさに、昭和と平成の時代そのものでした。そして、篠山さんは、被写体と写真の境を越え、響きあい、インスパイアし合いながら、新たなエネルギーを獲得し続けているのではないかと感じたのです。

総合芸術と呼ばれる「パフォーミングアーツ」は、さまざまな要素が絡み合い、ジャンルをクロスオーバーし、その輪を広げながら発展を続けています。400年以上の歴史をもつ歌舞伎は、話題の事件や文化を題材に、過去と現在を照らし合わせながら、「今」を演目に取り込んできました。だからこそ「古典」という枠に収まらずに、マンガなどの現代日本カルチャーと融合した新しい歌舞伎が生まれているのだと思います。一方で「新劇」の流れを汲む「演劇」は、まだ歴史が浅く、「今」に新しい出会いを求めると同時に、過去を振り返り、古典に立ち返ることで新しい何かをつかめることがあります。そうやって「越境」し続けることで、舞台芸術が活性化していくのではないのでしょうか。この「KAAT PAPER」を手取る方にとっても、これがひとつの新しい出会いになりますように。

※ご意見・ご感想をぜひツイッター・インスタグラムに「#kaatpaper」を付けて投稿してください。もしくはkouhou03@kanagawa-af.orgまでメールをお願いいたします。

今日はKAATに何しに来たの?

観劇やアート鑑賞、街散歩など、さまざまな目的でたくさんの方が集まるKAAT。そこで、春のある1日、KAATを訪れた人たちに「今日は何しに?」と声をかけてみました。



- 共通質問**
- Q1 今日は何しにKAATに来ましたか?
 - Q2 お住まいは近所ですか?
 - Q3 KAATにはよく来ますか?
 - Q4 KAATのことはどこで知りましたか?
 - Q5 KAATの好きなところはありますか?



- Q1 友人が『象』の演出を手掛けているので、それを観に来ました。Q2 都内に住んでいます。Q3 今回が初めてです。Q4 仕事でこのあたりに来たり、近くでライブを観ることがあって、存在は知っていました。Q5 KAATで友達が演出した作品が上演できることが嬉しいし、この周辺も歴史があってKAATの建築も素敵ですね。



- Q1 山下公園に遊びに来ました。NHK横浜放送局の隣にKAATがあったので、立ち寄ってみました。Q2 大和市と座間市です。Q3 KAATになってからは初めてです。Q4 ここに劇場があるということは聞いたことがありました。



- Q1 『シェイクスピア物語〜真実の愛〜』を観に来ました。Q2 都内から。Q3 初めてです。Q4 名前は知っていたので興味があって。今回は会場がKAATだから観に来ました。Q5 ダンスの公演もたくさんあるのがいいですね。また観に来たいと思います。

KAAT 公演スケジュール 2022 SPRING / SUMMER

5月1日(日) - 6月5日(日)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines	アトリウム
5月1日(日) - 6月5日(日)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 山本卓卓『オブジェクト・ストーリー』	アトリウム
5月1日(日) - 5月8日(日)	ROTH BART BARON "HOWL" at KAAT ~LIVE SHOW & 360° IMMERSIVE SOUND DESIGN~	大スタジオ
5月6日(金) - 5月8日(日)	DaBY / SandD 小尻健太+森永泰弘『ころり』	中スタジオ
5月7日(土)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 ケダゴロ『「 세월」クリエーション・ドキュメンタリー』	アトリウム
5月11日(水) - 5月15日(日)	五大路子 ひとり芝居 『横浜ローザ 赤い靴の娼婦の伝説』	大スタジオ
5月13日(金) - 5月14日(土)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 近藤良平『新世界 solo』	アトリウム
5月20日(金) - 5月21日(土)	KAAT EXHIBITION 2022 鬼頭健吾展 Lines+関連企画 小尻健太『Study for Self/portrait 2022』	アトリウム
5月21日(土) - 8月7日(日)	劇団四季 ミュージカル『ノートルダムの鐘』	ホール
5月26日(木) - 5月29日(日)	ケダゴロ 『 세월』	大スタジオ
6月17日(金) - 7月3日(日)	CATプロデュース 『テーバランド』	大スタジオ
6月24日(金) - 6月26日(日)	月刊『根本宗子』 『新しい試み』	小スタジオ
7月20日(水) - 7月24日(日)	KAAT キッズ・プログラム 2022 『ククノチ テクテク マナツノ ポウケン』	大スタジオ
8月11日(木・祝) - 8月21日(日)	KAAT キッズ・プログラム 2022 『さいごの1つ前』	大スタジオ

※情報は5月2日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
<https://www.kaat.jp>

- みなとみらい線:渋谷駅から東横線直通で35分!横浜駅から6分!
日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
- JR根岸線:関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄:関内駅から徒歩14分。
- 市営バス:芸術劇場・NHK前すぐ。
横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分)
桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分)
※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。
ただし、148系統急行線を除く。
- 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用下さい。
指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団

KAAT神奈川芸術劇場では新型コロナウイルス感染症拡大予防対策を徹底し公演を実施します。ご来場前に必ず、劇場HPの「ご来場のお客様へのごお願い」をご確認ください。

